逢悦弥誠

上

逢悦孫誠 全三冊

落書菴景筆作

一妙開保登由画

繪本逢會山序

夫見あふ者のおよそ一時にして熟慧を知るその
心の病ひ去て成ぬるぞ故よりて俗人教を学
てう高さ学ぶを主につまるとをたゞく我身の浮と
あらぢまぶん父母兄と憂るを能棒をなぐら
せくその熱をまぬぐうをとりや今流行の春画
艶本と関するを聊悟道を形に情緒を

以く俗人を論じ視そのもとえのちりぬるを。
さとる仏若れ人生仏の前耶蘇泥大江山四角な
筋を処く梅角まして鬼たける女房のほのも
をれ〻要或い九く赤い服褄又い長くも紙くも。
自面自去い心まうも。水流れと人のり方そのも
沙弥と深夜を渡て去れりと。邪中ス基も女房を
好ぐさもらふ大将。悪失兵衛景華述

してんのう
四天王
おえやま
大江山
入り
の
ち

四天王
土蜘蛛
たゝぢのぢ
一勝閑
祝由重

藝者おさと
信濃屋おさる
追分十左衛
三ツ目屋雷蔵

子持おやま

あまへさまへ江戸へごちらで入ッあるるとさてハ山の内でゆきこれで三廻りあります
ますがまぐ二まいりなくりハ
いさーまもろう
あそびに入ッあるのまー俄に徒歩でこりあります

いさみ細五郎

有がとうございます
江戸ハ三田で親父の代からありますがちっと遊びがまだまて湯治場へおッとくらをしまーさがさてく不自由でいられをんでも山家そだってさるーおまぶごぎりません江戸流とゆとあるろうごぎりますとおやうまーも
せひあがりますと

旅客 真多八

湯女おうら

湯女おまあ〜

旅客弥三郎兵衛

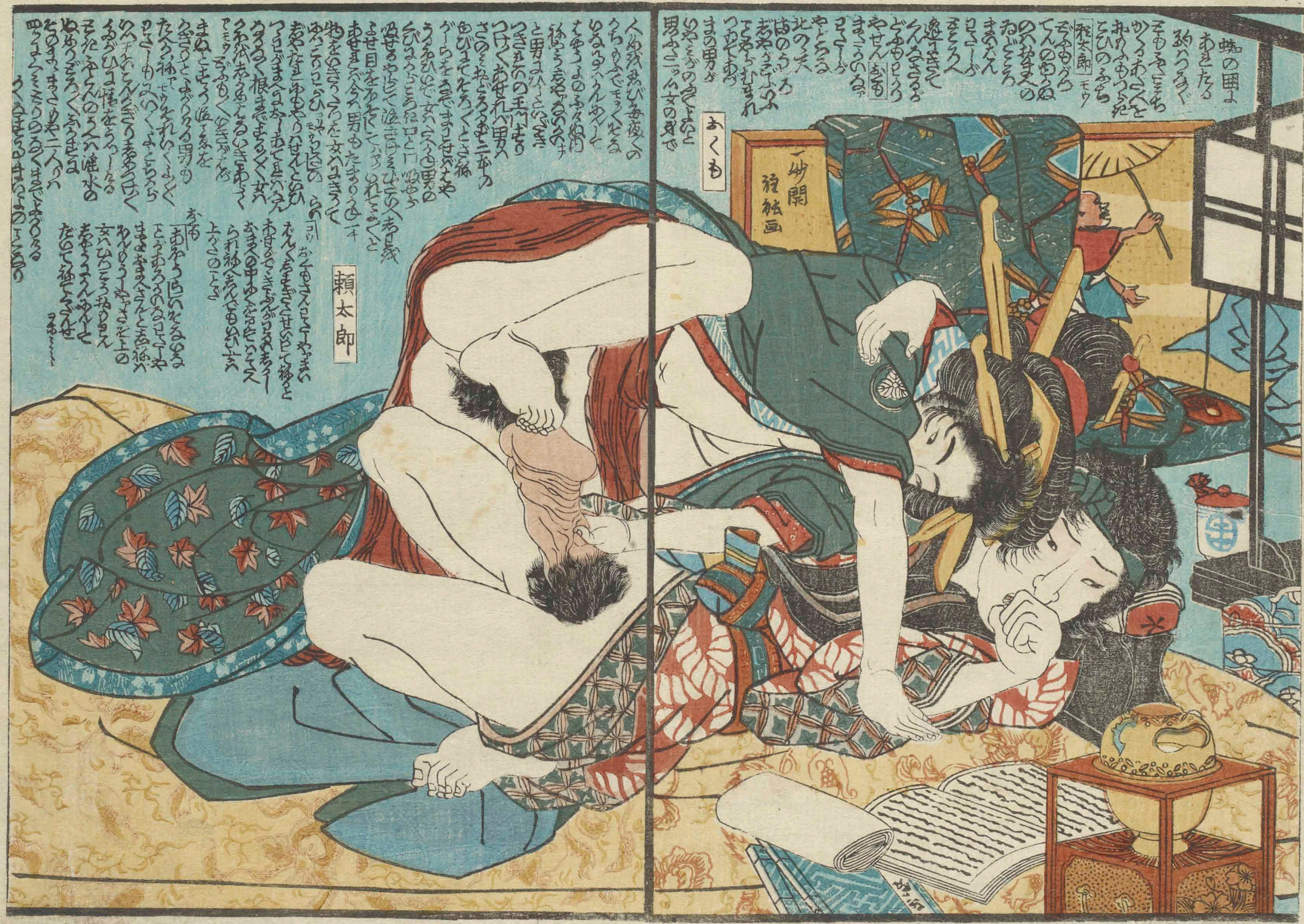
ごぎりますのやうるくでごぎりません
あんばやうで俄に女のやうでごぎります
ます
次ハそれからあんぐくハ三人たに知てゆるうオイ俄ニさえまさんーまあさ
逆ハ八ひさりもいらのおうぎさ

逆ハ江戸長谷川町で岩井条三郎とゆて役者で
ゆきり手ます
次ハどちらもオの岩井紫若といひ
やます
まあ〜ヲホ〜田舎者だうちあるまあと思ひ出るとる去年の夏紫若ハ小田原へ
参りまして山うぐと金ちをて大あり
のこーさせあるとてらおあと四五女ろ物ホ
あるりまーさ随分あるとてをります
ちうぐ〜ちまあへよ平四郎も条三郎もあるりまーこ

其二

旅客弥三郎長陽
旅客喜多八

子持おやま
繁五郎


蛾の男よ
あきたる
ゆうぐれ
そもそもこれ
かくるおんなを
あれかもうちた
こひのふち
頼太郎
モウ
そもそもぐう
てんのもとの
のべおまえの
ねどころ
まくらえん
ひさしぶり
そころえん
逢ひきて
えんをさそうど
どうもこころ
やせん
おくも
まくらのねど
ゴロゴロ
やとろる
北の天
満のうち
おやゆびのふ
てをちむまれ
つねてあり
まの男が
のやうぶのあとよと
男ふさっぷん女の身で
おくも
一妙閑
袖絵画
人ゆえ我れ恋ひ毎夜くの
うちもふでもうくそる
いなるへうんめして
なやこよのふなぬ門
彼ひろ志やあのえす
と男ふひとりぶき
つきえんの玉門より
つけくあせれば男へ
さのこねどろるおこ三ぬの
ぬひまてそろくとさ彼
ぐらをうぶまうせばえや
うるえひぞ女へうるる男の
ぶひろうころ口と口ぬやう
ぬせるやにて後ふこひこの人志日歳
よせ目をかたしてふり
あきまぶ今へ男もたまろうる一千
物をのきうこうを女へきて
ゆこうこうこひ
おやなまゆもやうせんとぬ
つうぶまへうあーあてまへえ
ろうるく根まぶまろくく女へ
ろえ我おろるいきあて
モウ
ぶもくぬきぶ
まぬこまろう返こえを
ぬきうとふぶろうる男の
たろうえ彼
ひこーのふいくふくこ
ぬへぶあいえんぶきうまろひく
ぬぶひこ性をうーなる
そたふやこへのうへ後水の
ぬぬうぶろくぶろる
たのまくまさりやこ二人のへ
ぬうふくこまうのうくまぶふるうる
ろくうまろるまいくよのこうり
頼太郎
コリ
おくもさんとこーやまの
むんくちまぶこせいとて彼と
あまぶぶできぶんぶうえまうー
おまえの中ゆふをいこえ
られ彼へまえぬでもいこ
上ふこのこうる
ホウ
あやうこ
ことぶおろうのうのこーや
ままおまえさんとこ彼へ
やんのうーやさぶ上の
女へひんこうれりほん
あやうこうんやんと
たのて彼こうぶせ
ゴホ〜〜〜

實(げ)に世(よ)の中(なか)の人(ひと)はあらねどもひとはあらぬ人(ひと)のかたちをおもひたちまさけり愛(あい)に東(ひがし)れ金龍(きんりう)岡(おか)のかりよ。何番(なんばん)仕(し)茂九郎(もくろう)とのふ男(おとこ)ありけるが身(み)貧(ひん)ゆへ、おろも醜男(ぶおとこ)ゆへ大(だい)のおどけものなりおろおろ女(おんな)色(いろ)をこのむとのふ人(ひと)どもいつのなりとゝめやこゝ廿三才(さい)まで悪(あく)といふ文字(もじ)へ知(しり)なぐのふ。あいふるる女(おんな)けまづいのりせの交合(まぐわい)をさくおねこ、女(おんな)肌(はだ)を始(はじめ)てとるくだぐ五人(ごにん)組(くみ)ふく。世(よ)代(だい)やりけるぶむの歎(なげ)きやるうこなくびとくの

歓喜天をいのり夜毎ごとに、何とぞ我に義女成
あらえたまへと、ねがひけれども、さらにその、しるし
みうけまづ、又〻一七日断食をしておりける、ある夜
うし三つごろともおぼしきころ、社のとびらをひらきて、
忽然としてあらはれいでの御姿をうつしたまふる。
画がける七福神のうち大黒天なり、仕茂九郎に一
信ふねんじられば、福の神ゆゑ、則
なんじが信ずる歓喜天ゆゆしく萬民に福徳をさづくる
なりさまでは、人にまことを信じて福禄官位を願ふか
ぎるふなんしてこれの俗人、おやまうして聖天は
貴ぶべきなれども、色ふかき神のやうにおもふ。
ひとのことにあらざるものなりすべてこれ
なりでく福禄をさづけるのみなり、さまでは人なん
がんのうもこれまづ、名んわんにおぼしぶ、さまざま
丹誠をぬきんで、信願のこころ成ちまでこの
されど女人に縁ぞをこれむまれなりときひく。
仕茂九郎大きに驚きたなごをあぶし、それ〻元来
好色者ふかく悪のこころをなるむとりんども。

郷らんのうり、醜男あがくせんどんつまろと
いへども、いまゞ女の肌をあらまをうくと壮盛ふ
獨寐つるまはるもゞげうくおまてようく
夜ゞ日毎ふねんゞたたまつるなりゞれ一ようう
やもめふくらつまるつらべ何ものゝみすいき
るゞぶえんたちくゞいちち命をはとりてゞさま
あんゞの世ふもゞ義男とうままろう十ぶんよ
好色をさせたまへとおのひきつく神ゞひ
けまゞ、福神のゞまつあうゞなんゞとゞ一命よ

ゝも祢ゞゝとならべかなひるさせんと社れ
うつよりおゞぶくあらくゞひとつのあはゞ
敬くくもちゞるくおれをきゞ
つるのまへくゞむゞまへゞ仕茂九郎
大よろとびおゞいるゞかの玉をもとちよ
のむとゞびとくく心身のふらんとうちふ
けるゞおゞぶくあつくゞはきあつをつまゞ
一下眠の夢のゞくゞさそいるゞの願うるゞと大よ
ろとびるゞの家よへう先うぬゞまかゞみ成

いさんとなるよげまをあげら生まうりしごとかく
うつくしくうるけまべ大きくきろろあび是まろく
歓喜天のおもかくうりと心魂よとろしあり難
ふ洗をつうひふしおのみとれうり食事をなし
風呂よりくく髪さうやたをなとと先下谷浅草
へんをあうまたせんとそうち出けるやまろ。
下谷金杉やりぬ来りあるる水茶屋ハ腰をうけ。
ゐぬこ粉を呑ま往来をうちうるのあるる処ゑ。
年のころ二十八九の女さあきまやうへ宜ぶねど
あぶのゆと髪を嶋田ぐしよ大き真べろ甲の
まゑぎ一ぷんあき木綿の唐ざん笛はびれ
表よりぬのうらハ納戸ぐえしのさか小紋の
ちくこ着ふろろ唐ぐんをのおび紙あきぢの駒
下駄をたたゑ茶屋の女房よあんさろをるとと。
ちりめよ仕茂九郎をえるぐゐたをぎけると。
仕茂九郎茶やのゆうがうよむうひあまを
いづまの女とぐひけまびまあくあの女中を
このさたの坂ものありしぐまれつた

おとこ好みにふうぬしとそのうちゐんきよ明くれ
嬉事のみゆく亭主い先々月ぢんきよしと
身まこのをいまこやのめぢこたり因く男
めうけ代たづねるきらくどもこうこくきこ
かるひゝ者みゝとこゆ毎日くあのさ代り。
捜こるあるくなりと吟仕茂九郎茶屋れ
女房のこたびこまりうこ。なふもゐんばくなり。
りこれを世話こたまりもとき。茶屋の女房
おかきこよろまびあみくこさまなりこいぶん
きまるゆゝ其ちさねと申へりれち方こ休居まこ
お客のうち氣こうこひゝのあるせうへりここる
あんさうこたびこるうあんづるり善へりとげと申せび
先くゆうこんこいせゆんと聞仕茂九郎もおをきこ
こうとびちうゆまんるゆゝと水茶屋の女房と同道
みゝたびのやゆゆ女のうちこ尋行くる

艶本逢繪山上之巻終

逢悦弥誠

中

三田
三田
三田銀五郎
戻り橋のおきさと

其二

コレサ ちっとまつくれ
まつぐのの下へ
あまるとと大
そうどうぐ
又お銭が
あまるぞ

三田網五郎

虎り橋のお北

そもだいこく
あんまのめを
ぶつてまつと
らまるりのの
むりぐろう
いのかァ
うまのろく
おまるよ

おきさ 網さんくまえんぐ
みんとおやとも
とまとだんろうも
みるひきらもねよ
ぐるぐるまはいごとろ
つまてのりく
二人ってあきさよ
とのふろひたい後
みぜおんなよ
わきころうのよ
くるくより

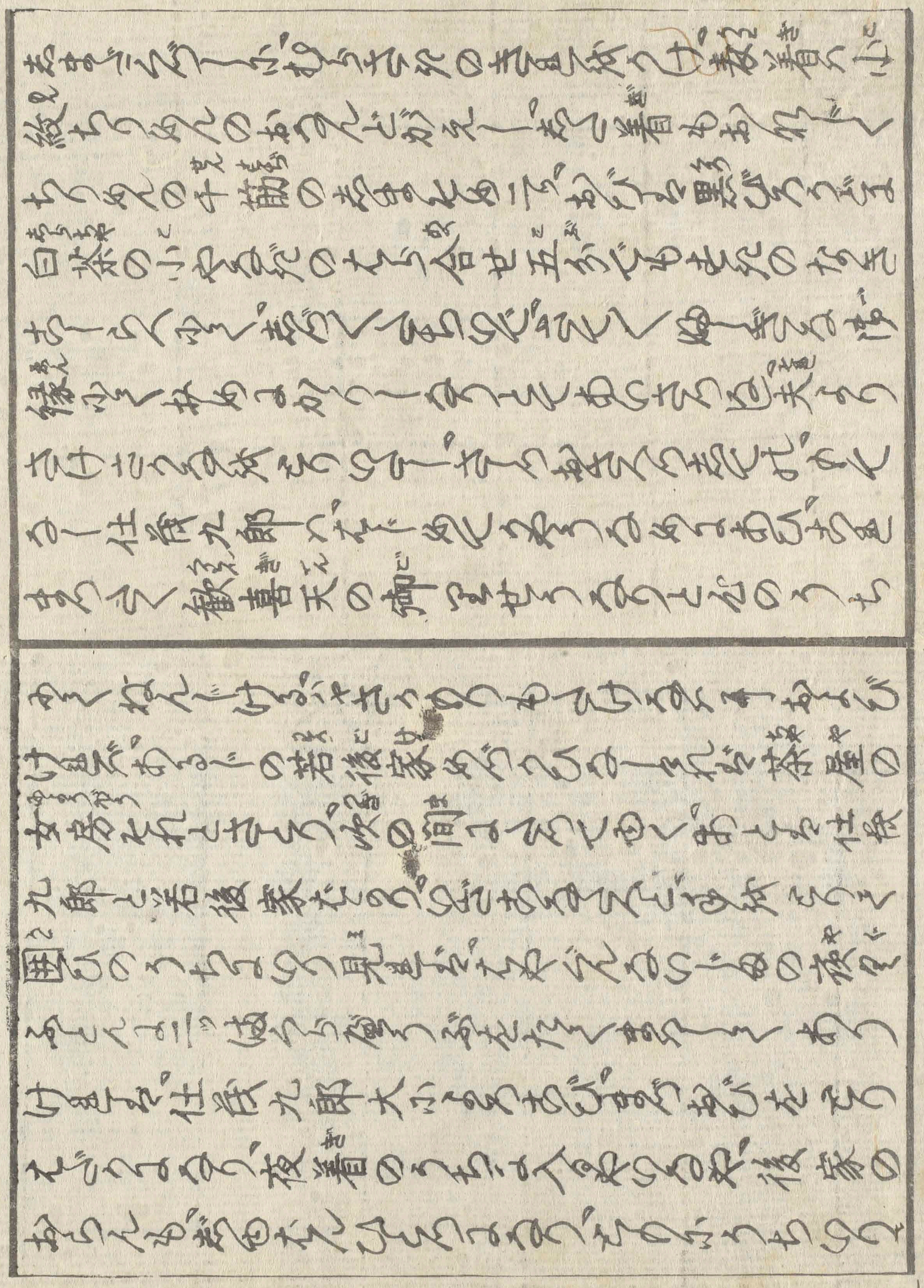
猫五郎 そらまわ
おさびのよおれる
ゆえおよ
ちんまよのろくえらく
ひらァ おきさ うあちわ
馬鹿らんわどやまさよ
モウ ぐやもくえふつよ
つまるとこのまち猫よ
口をおまちせさよ
ひくよくえー
ぐうて逸よ
せのひしょ
まことうくぐもく
又ひくよくくきえる
おありよく
コレリ

其三

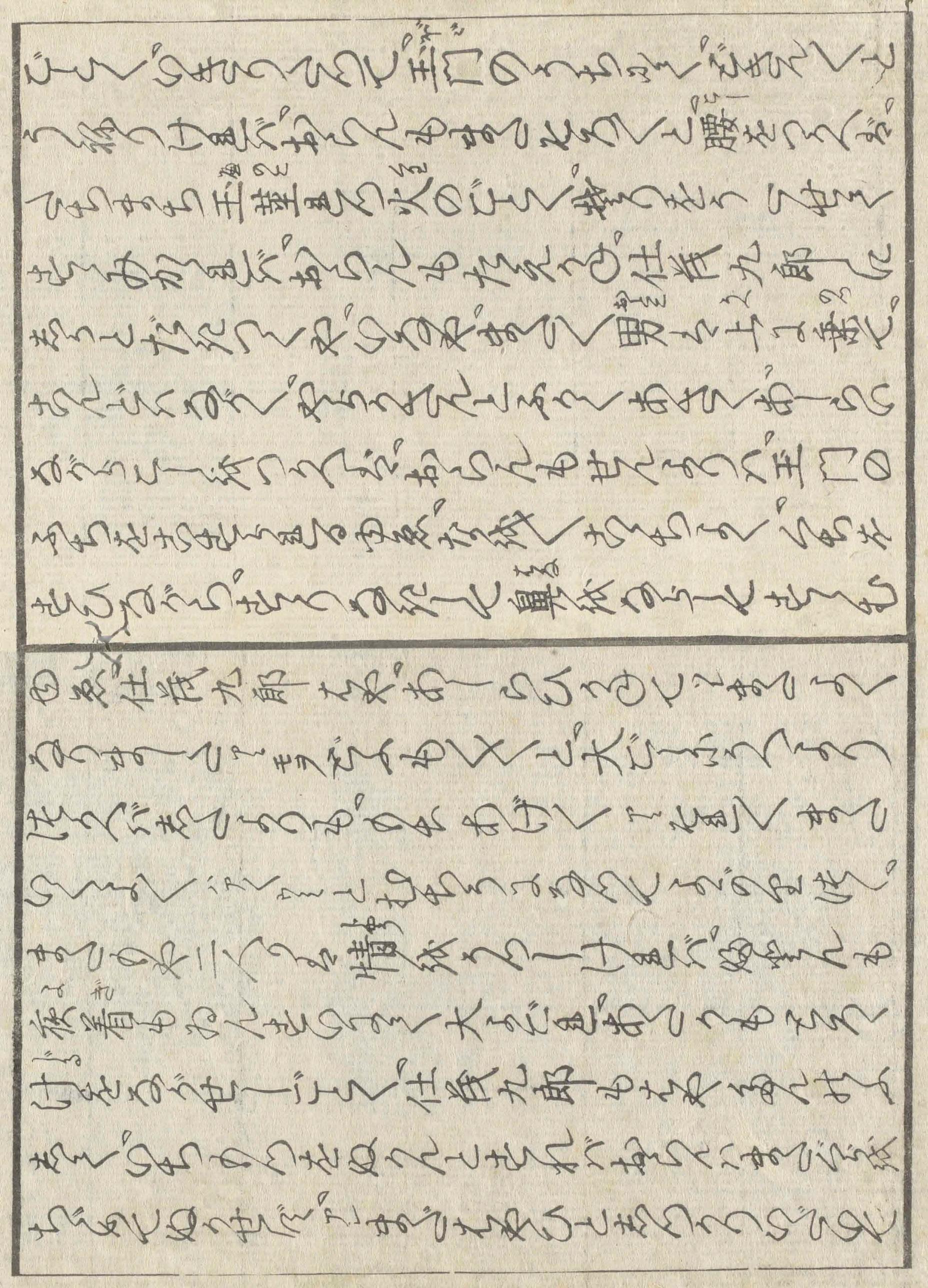
平井保太郎
三月のあたまとあたまとまたぶ
まちぐるまくぐるまくぐ
今月のたうらぶもの
ふ月屋でぐるまを
保太郎
奥女中
男もなまいたまりうを
四ッゆもらって
大おーしゅ
スカリくくと
あーらんぎ女
たんうまくまくまくまく
モウこうもあ丸よくく
ふぐるゆど
男もくまらぐ
ソうとさうやきまもくく

「むろまさんまさんがろくくとよ
「やどのまさんくさあのころもちのよく
仕舞屋町小間物

さても仕茂九郎ゝ茶屋の女房ふのぞるうまとく。
かの後家のうちふぐねゆえーーところ、井のくを
さらーーのたけ垣ゆゑ見ーの玄ごのわくゆうく。
庭のひらきをあけとび石ばくゑ一ト間ゑゆきあり
ゑまびこのの茶屋のゆうがうる。勝ゆうなふう
さてやたけまびおるーの後家あゆえふうろうあび。
まつぐ身ぐーらくーゑ面詰せんとくおどうくまこゆ
おきひとるゆあけくたちのぐる後家のようゑひ
きくゆうを化粧ゆゆつぐ香の匂ひまちくく。



仕義九郎が一ぢ物をアてるふ。ぬーくをーぢ。ぢ。ぢ。



そるさびとそぎまくもとろく下よりの腰をつゝえべ
仕業九郎もいま一番やんたてゝんとぎ式をゆらせと
けるべぐちまち一千物ぐるとこの如くるりきりまち
ちゝべひとゝは大きりこだゆとこのりをきりこごくゝり
たゞひまけどおとらざこの好色人ゐれべおりの
巻を見て双方の勝負をきりまゝ

艶本逢繪山中之巻終

日文研

逢悦弥誠

其二
「つうこうあんさんや為三さんよりあんがるとをあのひびるふくよがのぶんがいろらまとういるぞうるくよきのふのものぶ赤丸さんろらそびさろう祝あのんもいろぶろくくまとうぶるろるふモシヨ安さんろちゃるぜらんるこのろくるろくくらうきのも大ぜのこあまえのるひぶるぶらまこうはこのろけゆとあろくもロへびるよわんのとるぶれるるこれろくと
安そやゃあるぶひさおいらをえ祝へけどろいうこきをゆくおれ一てんだうサあるーヨやきろいてとダまろくくのゆくあられあくまさんがよろくくと安ぶろをいのひ祝へモョるふル名んがきの字サあるー一口でだろうそんるとをあのひびられど
安
白きとのすのへいろけのあるやうぶカウスをそらあのいこころであるひまるとへ千両ダとうしてえれべ白たもあるけるあぶ
はあいらぶも赤ひ祝ゆう
安ろうるぶ
ぶるゆのーあべそもきこのサそるゆネをいらぶこゃノところちゆるうこむりよ女のあべをとくあるーーあびをこう祝へでるよのうるる安ーとぶるあられるのゆのうこあるこメゆまぶとゃたあるうとだきーゆロとロゆるうへまるくるをゆーーゆまるくくゆるこれるるゆまくさらうくくとゆるこるくくとのひうくあるいこたゆくまをるこぶこう名るこのんうり玉草のさるゆぶさゆひらをこるりまのゆぶあるうへのゆゃ上新ーとゃゆくいまるくくとゆるこのたあるくスゆくくアモウぶまゆくアイーるまトひちあるるる男もの更るまりるゆスかりくくこあるらひつアゆるれもるえられトたぶひ怪をるゆぶ

町内氏神
上
一夢間狂歌五
仲丁の

其二

其三

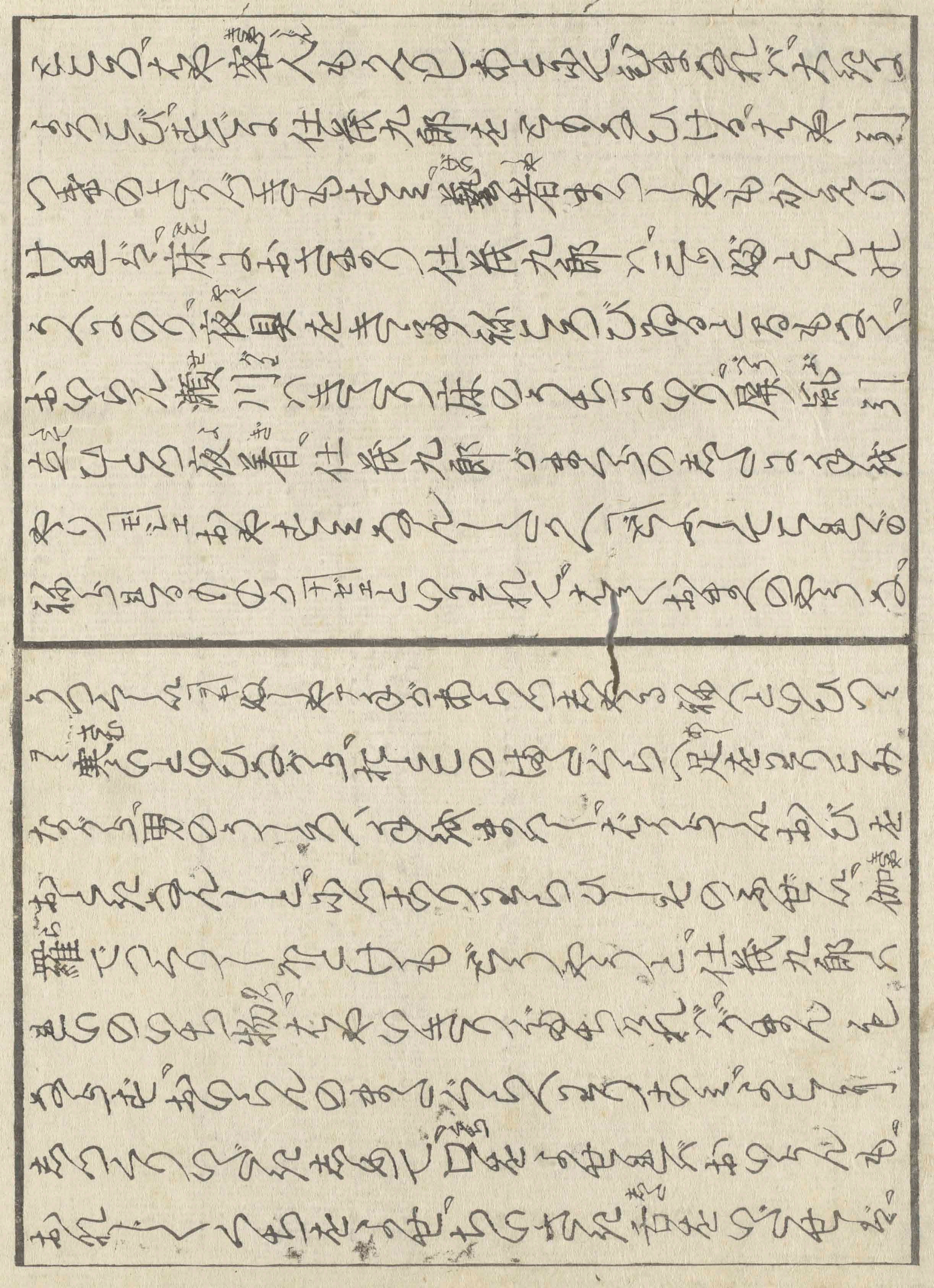
其二

扨も仕義九郎家おくんがかくふと日の七ツごろよりたゞあおくるる朝まぐねぞくるのちみぞんとていくぎりもなく。だやうをうつしけるべおらんをこと乳かろ氣ようひ。仕義九郎を引とめ毎日孫味義のりんごちをうゆけるぞおのりんぞ三日三夜嬬軍のをゆく日義おるるうさとろの仕義九郎もいろ青さあて肉づなし眼もくぼをられぞ。ほくくあろは花のようやうがるところは日の十日を居らべ命もうしあるなし

先のてい主のだんきよりもことうまりそく
きこーの引まゝ式こひゞくらんときこーも
ゆるさぎぜひまいら初べうらぬ要事もあらべこのふ
同ろきこ屋ーといひけ長べ仕義九郎却ゆなおどろき
まことにやうよりひとりあまさ知ゆちゃきごくゞらきこ
獨身ゆと書こともなくべこるゞふゞゆうの身なれども
一新のあるゞなる長べさるあそ三日三夜屋どこうら原
由ゑ家ぬーたゞ兄長屋中ゆこもさゞきべこれな
ゆくくひとまゞ屋どこうえりこる式ゆまひ屋ころこ

あのゆうへ引うるる屋ーそれもまん中ゆうこのこ
ところゆりと聞くべ、おらんあらべたやくうえるる屋ー。
ゆうーその身ゆり少ゆ兄ゞるるこそ先の亭主のちやく
るゆをこりゞゞーお屋式着ゆくゆくゆく屋ーと、おゞ羽
をり、懐中ゆのまゞ、こりころえくゞゞゞられば仕義九郎
大きこよろおゞ、ゆうらべきこーの引る古借用つる屋ゆる
ゆりこくゞ着物をきゆくこもちのぞんとせーが立こゆり。
まゞ店式ゆまゆゆも隣家ゆ ゆゝこのかのゞゞりゆ
借銭もあり、こ屋をこらひゞこゆしられべおらんゆ

うまるきぶつりがだろうときてけまべ。仕長九郎いふやう。
ろう金六両りともあらべ。ろうくとのてけまべ。おらん
をぐまくえんきのひきでーまりぶ判で五文渡しけまべ。
仕長九郎も右のきんを受ていちうるくく渡ぶを
ちらいで箕海通りより大恩寺前へさかりつくぐ
おりまふう。まことてまあまでがあるまあ牡丹のちとやら
ありひとえまる歓喜天の市ひやくまりまんみち
おまいありせんとところまれたりひ。ふ原の土ま
きかりしところふと思ふまうこれおのをーゆを
えれどいまぐ大見世のまびーのおいらんをぐくまさ
おとあーざいうとい身ありとい金子も少しあり。
今日とそまれおりうるまべぐくまんと仲の町の
茶屋へあがりられば茶屋の女房ちいぐまま。
いやーからぬわとこ人ぶぐうあうるまべいろくと
りそるーけまべまぐ仲の町のげいーや二ぐだりり
よび茶屋の女房ちでめそれくまる祝儀を出ーるま。
我のところ名代の松前屋のおいらん。瀬川をぐく
えんといひけまべ茶屋の男さうそくまひまあ



仕義九郎をおくまくきをひ、玉門へのち物を
をてまゐせられぬぬえ式ひらきあんゐもたゐまを。
ちをまゐ〳〵うと仕義九郎お〳〵式つくへ一ア
おまちをとのち物よはらと式つけまゐがをるくと
をゐるとゐくどもだい者よくゆ者きをこゐのつゆ
けもゐたまくゐをゐこゐよとゐ堅十ゐんゐよお〳〵式
はをくをゐさをゐの瀬川のうもゐをん地よく
ゐれをゐををれてゐゐりゐゐこゐ〳〵ゐ
ゐいよゐゐ〳〵このゐゐうねゐと一ゐよゐゐ者先
ゐゐ仕義九郎もゐゐ孫お〳〵式をゐゐてゐれく
むちゐゐよゐゐゐゐゐゐゐをこゐゐ法さけぶとおゐゐんを
をとゐを者らるゐゐとのゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐくゐゐゐ仕義九郎ゐも今ゐたまゐゐゐゐゐち
時ゐ情をゐゐ〳〵けるゐを者おちゐ〳〵

艶本逢繪山下之巻終